慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	教育学の研究対象の限定の試み： 沢柳政太郎の教育学批判から教育学構想の過程に基づいて
Sub Title	
Author	佐藤, 智実
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2011
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.72 (2011.) ,p.172- 174
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成22年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000072-0172

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

教育学の研究対象の限定の試み

――沢柳政太郎の教育学批判から教育学構想の過程に基づいて――

佐　藤　智　実

1．先行研究の検討・問題の所在

研究対象の沢柳政太郎（1865–1927）は，教育史上，戦前を通じて，最も長期に渡り普通学務局長として在任した[1]，明治日本の有能な文部官僚だ[2]，と言われている。さらに，国定教科書制度成立に際し，普通学務局長として重要な役割を果たした，と考えられている。また，彼が第一次新教育運動の先頭に立ち，成城小学校を創設し，個人を基調とした，新教育を展開したことは周知のこととされている[3]。しかしながら，佐藤秀夫が指摘しているように，個性尊重を目的とした第一次新教育運動を展開した沢柳が，普通学務局長として重要な政策決定に関与した[4]，つまり，「天皇制下の公教育体系の構築者」でもある，ということは，沢柳研究においてあまり触れられていない[5]。佐藤がすでに指摘しているように，沢柳の生涯を包括的に記述した，新田貴代の著書『沢柳政太郎』[6]でも，国定教科制度設立に関してはほとんど触れられていないのである[7]。

以上のような指摘をした佐藤の問題意識は，従来の沢柳に対する解釈，つまり，個性尊重を掲げる成城小学校の創設者であり，自由主義者である，という従来の解釈では，彼の教育思想を説明出来ない，ということを意味するだろう。この問題意識に従い，佐藤は沢柳の教育思想を再解釈することを試みているが，国定教科書制度に関する沢柳の「うそ」を指摘したこと，沢柳が一貫して教育の現実と共に，教育の内容面に対する関心を持ち続けていた，という研究成果を提示しているが，彼の教育思想を統一的に説明するまでには至っていない。佐藤は自ら文部官僚時代の沢柳と新教育運動を展開していく沢柳がどのように繋がるのか，に関しては明確な結論を得ていないことを認めている[8]。

また，沢柳の教育思想の言わば二面性に着目した先行研究として挙げられるのが，中野光と寺崎昌男の研究である。中野は，沢柳の戦争観に着目し[9]，寺崎は沢柳の義務教育に関する論述を中心として[10]，検討を加えている。両者の研究で明らかになったことは，1918（大正7）年の第一次世界大戦の終了前後を境とし，沢柳の教育思想に変化が見られるのではないか，ということである。しかしながら，沢柳の思考変化の起点を明らかになったが，思考変遷がある，ということを前提にし，沢柳の教育思想をどのように説明することが出来るのか，ということを論ずるまでには及んではいない。

三者の考察を踏まえれば，異なるアプローチにより，第一次新教育運動を展開した沢柳と，「天皇制下の公教育体系の構築者」としての彼がどのように関連するのか，という問題を明らかにしようと試みている。佐藤の探究の結果からは，この沢柳の関連は明らかとなっていないのであり，この問題を解明する手がかりが，中野・寺崎の探究結果である，1918（大正7）年の第一次世界大戦の終了前後を境とし，沢柳の教育思想に変化が見られるのではないか，という解釈であった。

この沢柳の二面性を明らかにすることは，第一次新教育運動に対する解釈を再検討することを意味する，と考える。

2. 2010年度の研究概要

沢柳の教育思想の総体を明らかにするために，現段階においては，彼が提唱した教育学研究の目的と方法に焦点を当てた。

ここで，沢柳の教育学研究の目的と方法に関する議論を明らかにするために，1909（明治42）年2月20日に刊行された，彼の著作『実際的教育学』における所論に着目した。

沢柳の教育学研究の目的と方法に関する彼の議論を明らかにするために，まず『実際的教育学』における，教育学批判がどのように展開されたのか，を論じた。次に，彼がその教育学批判を通じて，「科学的」な教育学の体系化を試みたわけだが，そこでの議論を考察した。最後に，彼は「科学的」な教育学を構築するための試みの一つとして，研究対象を学校教育，特に普通教育に限定するが，それはなぜ限定されるのか，を論じた。

以上のように考察した結果，沢柳は「従来の教育学」は「空漠」である，と批判し，この「空漠」な教育学を「改造」する必要がある[11]，と論ずる。この教育学「改造」の試みの過程で，彼は，教育学の「空漠」さの原因を研究方法の根本にある誤りに求め[12]，この誤りの克服を図った。彼が自ら出した対案は「科学」的な教育学の構築であった。この「科学」的教育学の構築のため，研究対象が学校教育，特に普通教育に限定されなければならない[13]，としたのである。

この研究対象の限定の意義に関する彼の認識は，教育学批判の中に現れている。「従来の教育学」を批判する際，沢柳が多用したのは「空漠」である，という解釈であった。この「空漠」が意味するところは，「教育の意義」，「教育の範囲」，そして「教育の目的」においても，何ら一致した研究成果を提出しない，当時の教育学の有様であった[14]。教育という名のつくものはすべて研究対象とするは，研究対象が広がり，その輪郭が茫漠とすることにより，研究成果の一致がみられず，結果として，研究成果の蓄積も行われない[15]。

以上のような検討の結果，沢柳が主張した研究対象の限定は，学問研究の成果の蓄積が行われ易くするためにあり，そして，そのことが現実世界においての研究成果の利用に繋がる，と認識されていた，ということが分かった。

3. 今後の課題

今後の課題としては，沢柳の教育思想が人生の前半期と後半期で変化した，ということが先行研究において指摘されており，また，博士論文作成に当っても，その仮説を前提として沢柳の教育思想を分析しようと考えている。しかしながら，何をもって教育思想が転換した，と言いうるのかを，先行研究を踏まえ，再度検討したい。

注

1) 佐藤秀夫「文部官僚としての澤柳政太郎」（沢柳政太郎著，成城学園沢柳政太郎全集刊行会編『沢柳政太郎全集』別巻，国土社，1979年，p. 235）
沢柳は1898（明治31）年11月から1906（明治39）年2月までの約7年3ヶ月，普通学務局長の任に当たった。また，普通学務局長は当時の文部行政の担当者として序列第三位の位置に当たる。（佐藤秀夫「文部官僚としての澤柳政太郎」前掲書，p. 248）
2) 中内敏夫『近代日本教育思想史』前掲，p. 178
3) 佐藤秀夫「文部官僚としての澤柳政太郎」前掲書，p. 235

4)　同上，p. 235
5)　同上，p. 250
6)　新田貴代『澤柳政太郎：その生涯と業績』（成城学園澤柳研究会，1971年）を指す。
7)　佐藤秀夫「文部官僚としての澤柳政太郎」前掲書，p. 241
8)　同上，p. 250
9)　中野光『大正デモクラシーと教育　改訂増補版』新評論，1990年。
10)　寺崎昌男「解説」沢柳政太郎著，成城学園沢柳政太郎全集刊行会編『沢柳政太郎全集』第3巻，国土社，1978年。
11)　沢柳政太郎『実際的教育学』同文館，1909年（沢柳政太郎著，成城学園沢柳政太郎全集刊行会編『沢柳政太郎全集』第1巻，国土社，1975年，p. 6.）
沢柳政太郎「拙著『実際的教育学』に対する吉田学士の批評を論ず」『帝国教育』1909年5月（沢柳政太郎著，成城学園沢柳政太郎全集刊行会編『沢柳政太郎全集』第1巻，国土社，1975年，pp. 392，393.）
12)　沢柳政太郎「教育学改造の急務」『教育時論』854号，1909年，1月5日，沢柳政太郎著，成城学園沢柳政太郎全集刊行会編『沢柳政太郎全集』第1巻，国土社，1975年，p. 371.
13)　沢柳政太郎『実際的教育学』（前掲書，p. 46.）
14)　同上。
15)　同上。

マンガが伝えるメッセージの検討

――内容分析を用いて――

玉　田　圭　作

目　的

これまでのマンガの読みに関する先行研究は，どのような特徴を持つ読者がどのようなマンガの読み方をするのかという個人（読者）要因に注目するものが多かった。

たとえば村田（1994）は日常的にマンガを読む機会が多いものを熟達者とし，熟達度が効果記号としての背景の読み取りに与える影響を調べた。その結果熟達者のほうがより深いレベルでマンガを読み取ることができていると明らかになり，熟達者はマンガの冒頭部分だけという少ない情報でもテキストからの情報と領域知識を活発に相互作用させ豊かな状況モデルを作り上げることができると示唆された。

また中澤（2002）は，小学5年生を対象にCCCT（Chiba university Comic Comprehension Test）によって測定されるマンガ読解力が学習マンガ教材に及ぼす影響を検討した。実験参加者をマンガ群，小説群，説明文群に割り当て各群の比較を行ったところ，教材としての実際の有効性は教科書的な説明文群が高かったが教材への評価はマンガ群が最も好意的な評価を示した。そしてマンガ群内において，マンガ読解力の高い学習者はマンガ読解力の低い学習者に比べマンガによる学習の効果が高く，マンガ読解力がマンガ利用学習に影響していることを明らかにした。

このように個人（読者）要因についての研究はある程度進んでいる一方で，マンガの中のどのような要素や内容がマンガの読みにどのように影響するのかという内容要因についての検討はあまり進んでこなかった。そこで本研究ではまず材料として用いるマンガの内容を分析した上で，どのような読み方を